

# 「ちいろば」

(三浦綾子著)

(p.55)

「保郎君、学ぶということと、覚えるということは別ですぞ」

突如、そんなことを言って黙ってしまうことがある。黙る時には、保郎に考える時間を与えたいと思っているらしかった。

「帝国大学というのは、国の制度内の存在ですぞ。真理を学ぶ者は、常に自由でなければならないと、わたしは思います」

こう言って黙ることもある。

「保郎君、人間生まれて来て大事なことは、出世することではありませんぞ。只真理に忠実に生きることであります。然らば真理とは...」

そう問いかけて黙りこむこともある。保郎は時々、話しこんで空腹を覚えることがあった。高崎先生は時間を忘れて話しこむのだが、保郎の健康な胃腸は、時間になれば正直に空く。

(真理が大事か、食事が大事か)

保郎の心中に甚だ貧弱な論戦が展開され、話半ばに席を立つこともあった。

(p.210)

初めて保郎から結婚の申しこみがあった時、国一は反対した。国一は保郎を深く信頼していた。にもかかわらず、反対したのは、「和子には牧師の妻になる資格がない」という考えからであった。だが、一旦婚約を許した国一は、和子のためらいに同意はしなかった。

「けどなお父さん、あの人まだ高校三年の身よ。伝道は大学を出てからでええのとちがう？」

和子は言った。

「身分は確かに高校三年や。けどな和子、伝道いうもんは、キリストさえ共にいてくださるなら、できるもんや」

「そんな無茶な。保郎さんは牧師の資格もないんよ」

「和子、伝道の資格はな、神がくださるもんじょ。大学を出て、試験を受けて、それで信仰は太鼓判やと、和子は思っとるのか。まちごうてはいかん。学校は要らん言うわけやない。けどな、神が共にいて働いてくださる信仰、その信仰がなければ、伝道者にはなれへん。伝道者の資格は、神から与えられるもんや。ここんところをまちごうてはならん」

「そらうちもそう思うけど.....」

「ほんまにそう思うなら、行くがええ」

(p.225)

説教が始まった。保郎は、あたかも大勢の人々に話をするように、大声で話をした。

「只今拝読いたしました聖書の中に、<汝ら神と富とに兼ね事ふること能はず>の聖言がありました。幾度となく読んだ箇所ではありますが、私は今初めて拝読したかのように

新しい感動を与えられたのであります。先日読みましたある本に、もし、天国に行く方法

>という講演会と、<金持ちになる方法>という講演会があるとしたら、人はどちらけ多く集まるか、ということが書いてありました。多分人人は、金持ちになる方法の講演会に

多く集まることでしょう。それはなぜか、金という目に見えるもの、形あるものを、人々は信ずるからであります。<神>は形あるものではありません。目に見えるものではありません

ません。故に、あるかないかわからぬものを求めるよりも、人々は金を求めることに情熱を傾けるのであります。

(p.282)

<榎本先生、お元気ですか。ぼくは同志社大学の付属中学の生徒です。先日先生は、ぼくたちの学校に来てくださって、「偉い人とはどんな人か」という題で、修養会の説教をしてくれはりましたね。ぼくは、あんまり信仰のことは興味がないので、ふだんは熱心に話を聞くことはありませんでした。「偉い人とはどんな人か」という題ですから、多分歴史上の人物か、有名な人の話だろうと、勝手に決めていました。

ところが先生は、偉い人とはどんな人やと思う？ とぼくたちに問いかけ、それは人々に仕える人だと言うと言わはりました。そして、世光教会の保育園のアイバ(どんな字かわかりません)という小母さんの話をしました。そしてその小母さんが、園児の食事の仕度をしたり、便所の掃除をしたりしている人だと、言わはりました。

ぼくはびっくりしました。先生は、この小母さんの作るうどんが、京都一うまい、その訳は、園児の給食を手伝うことになった時、この小母さんは、わぎわざ本職の板前さんのところに行って、ダシの取り方や、料理の仕方をみっちり習ってきたからだと、言わはりました。責任感の強い人やなど、ぼくは思いました。けど先生は、「ぼくがこの人を偉いと思うのは、それは世光教会の便所を見てくれたらわかる。どんなに世光教会の便所がきれいか、これは見なければわからん。保育園児いうのは、皆小さい子で、いくら教えられても、きれいに便所を使えへん。うんこやおしっこをすぐにひっかけてしまう。にもかかわらず、うちの便所は誰も使っていないみたいに、まっさらや。うそやと思うたら、みんなで見に来たらええ。ぼくはこの小母さんのような人が偉い人やと、皆さんに言いたい。園児の便所なんか、適当にしておけばええ、掃除するそばから、どうせ汚すんやなどとは、この小母さんは決して思わんのや。その反対に、汚れるところやからこそ、こまめにきれいにしておこうと、そう考えるのです。一日に一度掃除しても、十回掃除しても給料はおんなじや。小母さんは給料のことなど、考えておらへん。自分の責任をしっかりと果たす気構えで、毎日を生きておる。自分のためでなく、人のために生きておられるのや。こんな人が偉い人や思う」

ぼくは、話を聞いてもまだ、「たかが便所の掃除ぐらい、いくらきれいにしたかて、そんなに偉いやるか」と思っていました。だから、友だちに、「その便所見に行こう」と誘われた時、「あほくさい」と、断りました。

(p.306)

「あんなあ、榎本者。実は、四国の今治教会な」

「今治教会？」

「そうや。今治いうたら、タオルの産地で有名やろ」

「はあ」

保郎は不得要領な声になった。

「この教会はなあ、八十年以上の古い教会でな、上野牧師が牧会してはったんやけど、上野牧師は先頃南大阪に招聘されて、今は無牧なんや。で、ぼくが君を推薦しておいたから、近日中に今治教会から何らかの連絡がある筈や。よう様子を聞いて、気持ち動いたら、君から直接今治教会に返事してくれへんかね」

何と答えたか、保郎は覚えていなかった。気がつくとも電話は切れていた。いいも悪いもない。第一番目に話のあった教会に行こうと、保郎はとうに心に決めていたのだ。何らかの条件をつけるのではなく、たとえ大きな教会であろうが、小さな教会であろうが、問題のある教会であろうが、招聘されればこの世光教会を去って行くつもりだった。どんなに教会員の一人一人がいとしく、親しく、宝のように思われても、別れて去って行くつもりだった。が、現実には話が来ると、保郎は意気地なく体が震えた。

一年半もの長い間、祈ってきた筈だった。とうに覚悟はできている筈だった。何も今更、がたがた震える必要はない筈だった。が、祈っていた時と、現実にはその場に立たされた時とは、ちがっていた。それはあたかも、死を覚悟して、いつ召されても従容として死のうと心に決めてはいても、現実には死に直面した時、動顛するのに似ていた。

保郎の只ならぬ様子に、洗濯物にアイロンをかけていた和子が、不審げに尋ねた。

「あんた、どうしたん？ 顔色が悪いわ」

「ほうかあ」

「何ぞ、あったんか」

「ほうかあ」

保郎はうわの空で答えた。

「あんた、確か田中先生言うてはったわな。田中先生いうたら、丸太町の先生ですよ」

「ほうかあ」

「いややわ、あんた」

和子はアイロンのスイッチを切った。

「何聞いても、『ほうかあ』。そんなのないわ。何ぞあったんか」

保郎は心を静めて、

「なあ、和子、何言うても驚いたらあかんで」

「何言うても？」

「ほうや」

(p.323)

明治6年 キリシタン禁制の高札が取り下げられた。

(今治教会初代牧師) 明治12年に今治に着任、21歳

横井牧師の受洗志望者に対する試験は厳格を極めた。試験は十日間に及んで行われたが、それは単なる教理のみではなかった。

<日曜日、稼業を休んで礼拝に出で得るか>

<ために生活が困窮するもよろしきや>

<妻の来手がなくてもかまわぬか>

<村八分にされても耐え得るか>

<万一、信者が処刑される世となりても、信仰を保ち得るか>

等々の鋭い問いが発せられた。返答に詰まる者には、信者となることを許さなかった。

(p.326)

「そうや。人ひとり集まらん日もあったわ。けど、ぼくなどいくら教会創立で苦労した言うても、ここの草創時代や戦時中の苦しみとは、比較にならんわ。そこへいくと、ママは戦時中の苦しみよう知っとるわけや。偉いなあ」

李野は急須を湯呑み茶碗に傾けながら、「そりゃあ、まあ知つとることは知つとるけど、ちいとも偉いことあらしまへん。思い出しても顔の赤うなることばかりや。な、先生、うちなあ、ご真影だの、神棚だの、日の丸だの、拝めえ言われるとな、手を合わせたり、最敬礼したりしたもん。警察や世間の人目が恐ろしうてなあ」

「ほうかあ、ママでもなあ」

保郎は吐息をついた。

「先生、笑うやろな。けどなあ、人間てほんまに弱いもんや。うちかてな、戦争が始まらんうちは、死んでもキリストの神以外に手え合わせることなど、あらへん思っていたんや。けどなあ、手え合わせんとな、警察に引っ張られるか、町の人に非国民言われて、お米の配給も打ち切られかねなんだんや」

保郎は大きくうなずいて、茶を一口飲んでから言った。

「ほうかあ。けど、ママは偉いわ。そんな時代でも教会を離れんかったんやからな。教会やめた信者も仰山いたんやろ。ぼくやって、もし戦時中に信者になつとつたら、すぐ逃げ出していたかも知れん」

(p.339)

「ま、先生、お聞きください。いつかこんな喧嘩しましたんよ。わたしもカッときますけど、三宅もカッとくることがあるんです。何で始まったか忘れましたが、わたし、家を出て行く言いました」

「ほう、奥さんがなあ。そら旦那さん困りましたやろなあ」

「いいえ、出て行くんなら、お前のものは一切合切みんな持って行け！一つも残すな言いましてね。わたしも意地になりまして、これもわたしのもの、あれもわたしのものと、せっせと荷造りを始めました。そしたらね、先生、三宅が腕を組んで見つめていましたが、何と云うたと思ひます？」

やす代は真顔になった。

「そうやなあ...」

保郎は首をかしげた。妻がせっせと荷造りをしている姿を、腕を組んで見つめている男の姿が眼に浮かんだ。

「先生、こう言うたんです。次々と荷造りしてましたらね、先生、それまで見つめていた三宅が、『おれもお前のものや。だからおれも持って行け！』」

思わず保郎と和子が、声を上げて笑った。二人は腹がよじれそうになるほど笑った。笑い過ぎて、和子の目尻に涙がたまった。ようやく笑いをおさめて保郎が言った。

「何とええ人やろな、三宅先生いう人は。そんな味のあるセリフは、めったに言えへんで。愛のある人なんやなあ。なあ、和子」

「ほんまになあ。ほんまにええ人やわ」

和子は涙を拭きながら言った。やす代は、「先生、それ以来な、わたし、出て行きますなどと言う喧嘩はやめにしました」と、幸せそうな笑顔を向けた。

(p.342)

保郎の頭に閃くものがあった。それは、いつの日か水野源三の詩歌集を、この世の人々に送りたいという願いであった。どんな状況のもとにその詩歌が生まれたか、それを知ただけで励まされる人々が、どれほどいるかわからないのだ。健康の者も、病気の者も、

体の不自由な者も、誰もが、どれほど大きな励ましを受けるか、わからないのだ。

三宅やす代が帰り際に言ったことを保郎は思った。

「先生。誰かが水野さんを訪ねて行った時、水野さんへの道を聞いたんやって。そしたら、その人が親切に道を教えてくれて、こう言ったんやって。源三さんは、わたしたちの町の宝です」

寝たっきりの人間、口を利けない人間が、この町の宝と言われたことに保郎は感動した。人間の真の価値は、健康不健康、あるいは体の自由不自由にあるのではない。保郎は体のほてるような、深い喜びを感じた。

「ちいろば」は、保郎の世光教会における信仰の半生を書いた、新書本大の冊子であった。「ちいろば」というこの名は、十余年前、まだ書くか書かぬかわからぬうちに聖燈社の仲綽彦がつけてくれた題であった。保郎は自分自身を力弱い小さなろば、即ち「ちいろば」に見立てていた。

「主の用なり」と招かれれば、いつどんな時でもお乗せして、力の限り働くのだと言っていた。仲のぶ彦はその言葉に感動して、いち早く題を決めてくれたのだった。

そんなこともあって、保郎はぼつぼつと「ちいろば」なる自伝を書いたのだった。その保郎の心を特に励ましたのは、長野県の坂城に住む、寝たっきりの脳性小児麻痺患者の水野源三だった。手足も利かず、口も利けぬ水野源三が、毎月、詩、短歌、俳句を発表していることに、深く心を動かされたからであった。

(p.372)

ハワイでの第一回日の伝道集会の夜だった。講壇の椅子に坐った保郎の目に、白いガウンをつけた聖歌隊が、静粛に入堂してくるのが映った。保郎は思わず、「おっ！」と声を立てるところだった。聖歌隊といえば、日本では二十代三十代層の人たちが、その大半を占めている。が、そこに現れた婦人たちの多くは白髪であった。

「なあ、るつ子、ほんまに驚いたんやで。あとで聞いたらな、平均年齢が……何歳や思う？  
何と聖歌隊の平均年齢は七十五歳やったんや」

「へえ - っ！？七十五歳！ほんまか、お父ちゃん、信じられへんわ」

るつ子が目を瞠った。和子が言った。

「るつ子、ほんまや。しかもな、ハワイのマキキ教会だけではあらへんのや。ロスでも、シアトルでも、聖歌隊の平均年齢は似たりよったりやったわ、なあ、あんた」

保郎はうなずきながら、裕に目をやった。

裕は、はっとしたように顔を上げて保郎と和子を見、「すんまへん。ぼく、感動したんです」と、言葉を切ったが、すぐにつづけて、

「ぼくは中学生の時から、オルガニストとして奉仕してきました。けど、今のお話をお聞きして、頭を殴られたような気がしたんです」

「讚美歌は、お父さんがよう言われるように、神への信仰告白です。どんなに歌がうまくても、信仰がなければ本当の讚美歌はうたえへんと思います。平均年齢七十五歳と言えば、練習するだけで大変や思います。神への本当の謙遜と真の讚美がなければ、とてもつづけられるものではない思うのです。その人たちは、年を取っても信仰の世界では、隠居しとらんのかなと思ひます。平均年齢七十五歳いうその事実に、ぼくはその人たちの信仰に打たれたのです」

ふだん無口な裕には珍しく、熟した語調だった。